

風評被害

福島第一原発の事故による風評被害が深刻です。

そもそも、風評とは風の便りということですから、真偽の程はハッキリしていないのが普通です。そんな不確かなものに人は何故左右されるかといえ、ハッキリしないからこそ興味も湧くし、不安にもなるということでしょう。いってみれば風評とは、「お化け」みたいなものですね。

人というものは誰でも噂話の一つもしたくなる時があると思いますが、愉快犯のような悪意はなくとも、それが聞く人の不安感と結びついたりするとあっという間に、それこそ燎原の火のように広がっていきます。しかも、広がれば広がるほど火元が分からなくなるというわけで、だれも噂話の責任を取ろうとはしません。しかし、結果として無責任な風評によって、経済的・精神的被害者が発生することは、見過ごすことができません。

何故、今日のような高度情報化社会で風評が発生するかといえ、人間というものは、昔も今も「噂話に弱い」という点では変わらないということなのだと思います。むしろ、情報伝達の手段が多種多様になっている分、噂は一段と早く、かつ、広範囲に伝播することになります。

今回の原発事故に関しても、現状とは異なる情報が流布して、農産物が販売できないといった被害が生じており、被災地では、大震災や原発事故に加え、二重、三重の被害を受けているといっても過言ではありません。

かつて、15年程も前のことになりましたが、カイワレ大根事件というのがありました。堺市の学校給食が原因でO157集団感染事故が発生し3名の児童が亡くなりました。その原因はカイワレ大根かも知れないという風評が広がり、カイワレ業界が壊滅的打撃を受けたものです。勿論、最終的にはカイワレは無罪でした。

当時を振り返れば、厚生省が、「集団感染の原因にカイワレ大根があるかも知れない」という中間発表をしたことが風評の発火点ではありますが、正しい情報が適確に提供されなかったことが風評被害を大きくした原因だと思っています。

そして、残念ながら風評や風評による被害は、今も起きていることです。

種々雑多な情報が氾濫する中、受け手の側で、何が正しくて何が間違っているかを峻別するということは、事実上困難です。

こうした中、風評被害をなくしていくためには、少なくとも、情報の出し手である国や企業などの関係者・報道機関が、正しい情報を適確に発信していくことが不可欠です。まして、情報を持っているものが情報操作をする、などということはあってはなりません。

また、報道機関は、ともすれば興味本位に走り、不安感を煽りがちですが、今以上に、正しい情報を過不足なく届ける努力をすべきです。

そして何よりも、情報の出し手は、受け手との信頼関係がなければ如何なる情報も正しくは伝わらないということを、肝に銘じておくべきだと思っています。(塾頭 吉田 洋一)